



巻頭インタビュー

やる気を引き出す 教育論

近藤義男・千葉市立大宮台小学校校長
(U15侍ジャパン軟式編成委員長)





千葉市立大宮台小学校校長
(U15侍ジャパン軟式編成委員長)
近藤 義男 こんどう・よしお

1960年 千葉県生まれ
東京学芸大学卒業 千葉大学大学院修了
両親に刺激されて教員を志す
千葉市立公立中学校
日本中体連野球競技部部長などを経て
千葉市立大宮台小学校校長
日本中学生野球連盟専務理事
U15侍ジャパン軟式編成委員長

指導者の役目＝「やる気」引き出す環境づくり 裁量を与え、個々の持ち味を経営に生かして

U15侍ジャパン軟式編成委員長や
(一財)日本中学生野球連盟専務理事を務めるなど
野球の指導者として知られる近藤義男・千葉市立大宮台小学校校長。
中学校の野球部顧問の時代は、大リーグをはじめ
プロスポーツの世界で広く導入されている
メンタルトレーニングの手法を生かした指導で高く評価されてきた。
自身の子育てでは、長男は中学校教員に、次男の近藤健介さんは
プロ野球の選手(北海道日本ハム)になり活躍している。
これまでの経験を踏まえて、子どもや教職員の
やる気を引き出す方法を投げ掛けていただくとともに、
学校現場に「Yell」を贈ってもらった。



学校管理職や部活動の顧問、学級担任など、対象となる相手は違えど、「人の前に立つ」人間が取り組まなければならないのは、今、ここにいることがとても楽しく、充実し、自分の居場所がある、日々成長できている—などと実感できる「環境」を整えることです。環境が良ければ、教職員は自然と学校をより良く変える方法を提案しますし、部活動であれば生徒から練習内容や在り方についても改善策が出てきます。よい提案があれば、どんどん実現すれば良いし、失敗したら管理職が責任を取ればいいのです。

こんな考えを平然と語っていますが、実は40歳くらいまで、部活動での指導では「私の指導に従うことが一番」と思い込み、指示・命令を繰り返していました。ある時、部の生徒から練習メニューや

やり方について提案が寄せられました。口では「試してみる価値はある。よしやってみなさい」と言いながら、内心、面白くありませんでした。しかし、ふたを開けてみると、大きな裁量を与えた生徒たちは以前より生き生き活動し、強くなっていました。

それ以来、指導者の役目というのは、自分の思い通りにすることではなく、個々の持ち味や考え方を生かし、さらに伸びるように支えることだと考えるようになりました。

振り返つてみると、私を育てくれた校長先生は、「何でも自由にやりなさい。責任は私が取ります」と語り、若かりし頃の私は粹に感じたものです。

現任校でも、かつての校長先生と同じく、教職員から提案が寄せられたら、「すごい!面白い!よし、やってみて」と応援します。学校全体の目標や方針から大きく外れていなければ、裁量を大事にしたいと思います。



では、私自身のやる気のスイッチはどこで入ったか。それは、海外の日本人学校での勤務経験とその後の

校長先生、同僚などとの出会いです。日本人会の中で、外交官や民間企業の方々と共に過ごすうちに、教育

よりよい教育に必要なのは入力体験 大変な時こそ「ピンチはチャンス」と考え方

では、私自身のやる気のスイッチはいけない、もっとさまざまなことはできない、もっとさまざまなことにチャレンジしてもいいんだ、といきました。

高校時代は、本人の希望で横浜高

次男の健介についても、小学校頃から野球が大好きだったので、せっかくなればよい環境をと考へ、野球の名門として知られる中学校に進ませ、練習に専念できるよう、自宅も引っ越しました。

長男は中学2年生のとき、英語の教員になりたいと言いました。それを聞いて私は、「英語の教員になるんだつたら、留学してみては」と答えました。結局、米国の高校に進み卒業、大学生時代も一時期留学していました。このときも、せっかくなればよい環境を与えるたいという思いでいました。

そして長男も私とほぼ同じ環境にあつたため、ごく自然に教員を目指すようになりました。

長男は中学2年生のとき、英語の教員になりたいと言いました。それを聞いて私は、「英語の教員になるんだつたら、留学してみては」と答えました。結局、米国の高校に進み卒業、大学生時代も一時期留学していました。このときも、せっかくなればよい環境を与えるたいという思いでいました。

私の両親は教員でした。父親には、子どもの頃から野球部の練習に連れられ、「部員のお兄ちゃん」たちからずいぶんかわいがつてもらいました。父が楽しそうに指導し、部員が楽しそうに練習に打ち込む姿を見て、自分も将来、教員になり、野球部の顧問になりたいと思うようになります

した。

そして長男も私とほぼ同じ環境にあつたため、ごく自然に教員を目指すようになりました。

長男は中学2年生のとき、英語の教員になりたいと言いました。それを聞いて私は、「英語の教員になるんだつたら、留学してみては」と答えました。結局、米国の高校に進み卒業、大学生時代も一時期留学していました。このときも、せっかくなればよい環境を与えるたいという思いでいました。

校に進みました。

野球が好きな子どもの多くが、将来プロ野球選手になりたいと思うの

と同様、父親も「狭き門だけど、プロになれたらしいなあ」と思うはず

です。私もその一人でした。

でも、日本中体連での活動（野球

競技部部長）を通して全国の球児のレベルを知つて、プロになれるとは思つてもいませんでした。

横浜高校に進むときも、「残念だけど、ベンチ入りさえできなくなるよ」と伝えたほどです。

旧知のプロ野球経験者も、「健介くんはいい選手だけど、彼よりも体格や能力、センスに恵まれた選手は数知れず、壁を越えることはまずできない」と見ていました。

たくさんいます。1年生のころ、一緒に練習してきた先輩がドラフト1位でプロになりました。健介はこの

時、どこまで練習すればドラフト1位のレベルに達するかを肌で理解す

ることができました。目標すべき到達点が明確であつたため、着々と練

習したのです。しかも、思いつきり楽しんで。

プロで一定の成績を残すようになつた頃に、プロ野球経験者と語り合

う機会があり、「健介くんをプロにさせたのは、間違いなく『環境』で

す」と分析しました。



を教育の世界の中だけで考えていてはいけない、もっとさまざまなことをや子育てにも影響を及ぼすことになりました。

私が「Y e 11」を込めて、教育関係者に伝えたいことは、よい環境を作り出すには、とにかくたくさんの人材を育てることです。入力体験をしておかないと、変化の激しい今の社会の教育の在り方を考え、実現させることはできません。

教職の道は楽しいことばかりではありません。時には悩み、苦しむこともあるでしょう。でも、「ピンチはチャンス」と前向きに受け止め、耐えず入力し、楽しみながら歩んでいきましょう。

長男は中学校教員、次男はプロ野球選手 「夢がかなう環境づくり」を大事に